

せながむじ

発行・古平町史編纂委員会
編集・古平町史編纂室
第十九号（毎月一日発行）
平成三年四月一日

明治初期の古平の農業

近 藤 せ方 一

永住者の増加とともに、生活の安定のためにはどうしても農業が必要である。他との交流があまりなかった時代であり、従って農作物はどうしても自給しなければならぬ。古平の永住者はもともとニシン漁業を目的としたので、農業にはあまり関心が高かったのではないかと考えられる。古平は農業の不適な自然条件である。

幕末の探険家、松浦武四郎は、「西蝦夷日誌」で、次のように記している。

『トマリアサム是より九折上（つづらおり）峠右つづき、左丸山岬、時しも新樹噴桜・桃李いとおもしろく咲きたり。ま

たここに山しやくやく多く生えたるよし。：下りてモヤサン（人家）に至る。此ところ小沢にして平地西南向、畑作せば頗る宜しかるべしと思う。』
旧古平高校前の一帯を指しているのであろう。
彼は、ビクニからへ口カルウ

大正時代までの鯨を除く各種漁業

—— 漁獲していた主な魚族と海藻 ——

古平町を初め西海岸一帯の繁栄は鯨を抜きにして語ることはできないが、ほかの漁業はどんな状態であったのだろうか。昭和になり、それまで主役で

スを通り、トマリアサム（美国側トンネル口）の横を登り旧高校前を通り、古平側のトンネル口あたりを下っている。
やがて彼は、古平運上家を過ぎ古平川にかかる。
『川幅一二、三間、是則フルビラ川也。兩岸平地、土地肥沃にして畑地よろし』と、古平平野を絶賛している。
現在と比較しながら読むと、大変興味ある記述をしている。
旧古平高校前の土地は未開のままであるが、当時も農地としては開墾されていなかったようである。ただ、干場として利用されていた程度である。

るがすような大きな影響があったが、雑魚漁は、家族の労働力を主にし、雇人も少ない小規模のものであったから、その影響も狭い生活の範囲でとどまっていた。
大正の中ごろまで、古平を中心として漁獲されていた魚族、海藻類について資料からまとめみたい。
(1) 魚類と海藻の種類
①以前から漁獲していたもの
サケ・マス・ブリ・サバ・マゴロ・カレイ・タラ・ホッケ
・イワシ・コナゴ・タナゴ・フグ・ハタハタ・タコ・アワビ・ウニ・ナマコ
②漁獲が少なくなってきたもの
カニ・ホタテ・ホッキ
③明治以後漁獲しているもの
タコ・サンマ・アユ
④偶然に漁獲したもの
コニシン・ボラ
⑤以前から採取している海藻類
コンブ・ワカメ・ノリ・フノリ
（次号・魚族の移り変わりと、その漁法について）

あつた鯨に代わって登場してきた各種の漁業、また、脇役のま消えてしまったものなど、それぞれに歴史がある。
鯨の豊凶は、町の経済をも揺

親子熊に初めて出会う

最近、古平で熊が出たとか、熊をとったとか、あまり聞かなくなつた。

食料事情があまり良くなかつた稲倉石鉱山時代は、チョイチョイ熊の肉を食べさせてもらったものである。少し土臭いが、なかなかのご馳走であつた。

ある時、熊に出会つたことがある。鉱山へ行く途中、滝の沢

故郷を想う

後編 藤井孝平

というところがあり、そこには入山するものをチェックする詰所があつて、少し行くと稲倉石の学校がある。その中間ぐらいの所に急峻な崖があるが、その途中の岩場を、親熊一頭と小熊四頭が川に向かって下りて来るところだつた。多分日曜日の午後だつたと思うが、七、八人ぐらいがそこにいた。誰言うとな

「熊が出たぞおつ、こつち」
 に向かつて来るぞオ——と大声で叫んだので、熊の方も驚いたようで、立ち止まってこつちの様子をうかがつてゐる。大勢いたので怖くはなかつたが、そう距離にして百五十米ぐらいか。やがて、頂上目がけて真つ直ぐに登つていった。まるで走るようなスピードで、頂上まで、あつという間の速さだつた。岩石が音をたてて落下して来た。

もつと見ていたような、ヤレヤレといった安堵感が複雑に交差した。きつと川に下りて、蛙か鱒、サルガニでも食べに来たのだろう。
 索道の関係者によると、大名の沢や滝の沢は熊の通路だといふ。越前柵屋のおじいちゃんやその仲間の人は、毎年何頭かの熊をとつていた。

つづく

二 美 国 町 二 佐藤与助漁場と ウインチ設置

積丹町・梅野彦三郎

厚古に佐藤与助漁場がありましたが、樺太の恵須取（ウグレ）で天内炭鉱と木材業を経営し、船を持って運送もやつていました。明治四十二年にトロール漁業を始めるなど、進んだ経営をする人でした。
 大正九年には、早くも漁場にウインチを設置したり、また、鰾の加工も、かなり高台まで利用してやつていました。
 私たち子どものころ、ウイン

士口平にも 丹頂鶴が来た
 去年の暮れに飛んで来た白鳥親子が、居心地が良いのか、また熱心なファンもいるせいか、すっかり古平が気に入つて居つてしまつたようです。
 大正十二年十月中旬、関口さん宅「晴耕園」付近の池に降り

ちの台から海に飛び込んだり、トロッコの線路の上で遊んだりしたものです。

この佐藤漁場の建物は、昭和十二年の火事で残念ながら焼失してしまいました。

また、小泊の漁場でも、小規模なものでしたがウインチを設置してました。

なお、先の佐藤漁場で所有していた船は、イヤサン丸（千二百ト）、高見丸（五百ト）、美国丸（四十八ト）、末広丸（二十五ト）の四隻でしたが、この内の末広丸が、後に美国・古平・余市航路の定期船として親しまれた瑞広丸です。

（美国町に在住で、『せたかむい』愛読者です）

丹頂鶴が来た
 たのを見た——という三人の談話があります。

関口秀哉さん、関口孝さん、高橋源吾さんの三人です。

当時はきじもかなりいて、後に猟友会の人たちが幼鳥を放したという話も聞いています。

会員個々の向上と 家庭教育への願い

思えば、昭和三十四年に創立された《二葉会》も、平成元年という記念すべき年に創立三十周年記念を迎えることになりました。

戦後の混乱も収まらないう昭和二十四年、古平町の大火があり、西部地区が全焼という、悲しい、そして辛い時代がありました。したが、想像もしないその後の復興ぶりでした。そんな時、みなと婦人会の山口会長さんからアドバイスをいただき、小竹栄子さんを会長として《二葉会》が発足いたしました。

変動の時代に、幼い子どもを持つ母親としてどんな家庭教育が必要なのか、また、どんな母親でなければならないのか、同

二葉婦人会の歩み

じような悩みを若い主婦に呼びかけたところ、八十五人ほどの方が入会されました。当時は、《若妻会》と呼ぶ人もおりました。会の名前もみんな考えました。いろいろと出ました。土の中から元気よく出た二枚の葉のように、力強く清らかで、風雪に耐えて逞しく成長することを願いました。《二葉会》に決まったので、清らかに力強い母親として、妻として子育てに専念しましょうと、こうして産声を上げたのです。

会員一人一人が自己の向上を図ると共に、会員の連帯意識の高揚に務め、親睦を図り、会員が心を一つにして一生懸命努力して参りました。だが、お互い子育ての真つ最中とあって障害もたくさんありました。しかし、会の運営資金づくりとして化粧品や衣類の販売、素人演芸発表会、映画会、そして、チャリティバザーで社会福祉に、会員個々の真心を結集して進め

てきました。

ひと口に三十年といひましても、当時、幼児であった人たちが子どもを連れて来るほどの年月です。地域的に、西部方面は漁業と水産加工の町です。そして皆が勤労婦人でもあります。託児所も冬季しか開かれませんでしたので、夏季になると大変困りました。それで、昭和三十三年の春に、夏季でもお母さんが安心して働けるように託児所が欲しいということを、さき

《鯨》は《鯨》の敵？

捕鯨計画も反対される

——本道西海岸にも鯨が——
日本沿岸での捕鯨をもっと盛んにしなければならぬ。これは直接の利益よりも、鯨漁を守るといふ間接の効果があるからである。

調査によると、鯨は、鯨の群来と繁殖を妨げていることが分かった。子鯨は数の子を好んで

に託児所を開設されていた、みなと婦人会の山口会長さんを通じて、町長さんにお願いをしていただきました。そして、有資格者の保母さんを一人依頼することができ、あとは二葉会の役員がボランティアで助手を勤めました。これが後の西部保育所への足掛りになったものと思えます。

——つづく——

(二葉婦人会創立三十周年記念誌より・前会長本間喜美子)

食べ、一頭の鯨の胃の中には五石もあった。漁期を五十日間としても、その間に食べる数の子の量は莫大なものである。

また、鯨が海岸に寄る鯨に恐怖を与え、散逸させたりすることとはしばしば見ることである。ところが、積丹に寄留していたある漁民が捕鯨を計画したところ、「そんなことをされたら鯨が寄りつかなくなる」と、周囲の漁民から大反対され、この計画もオジャンになったとか。

(昭和二十二年・北水協会誌より)



映画 思いたすこと

本間 銀 朔



映画は、新地町の古盛座に巡回映画が来て、阪妻の『砂絵呪縛』や、阿部五郎の『月形半平太』、また、高木新平という俳優も出ていた。『神州天馬侠』は長編で、ちょうど面白くなつたところで次回上映となり、次の巡回日が楽しみであった。

入場料は、小人十銭・大人二十銭で白黒映画であった。テレビも無い時代であり満員であった。ある時、映写幕の裏から見たことがあったが、左右が反対に見える。左で刀を持って切り合いをしているが我慢して見ていた。そのころは、映画といわずに活動写真といっていた。

働いて得る収入に、昆布巻きがあった。乾燥した長い昆布を手で伸ばして巻くのだが、一貫目(約四割)巻いて五銭、二貫目でやっと十銭。手は塩だらけ

でカサカサになり長時間やると飽きてくるが、それでも何とか巻いて終わる。昆布も今のものより長く幅も広く、漁獲量も多かった。昆布巻きの仕事も何日かあり、大人にまじって子どもたちも働いた。

ほかにイカ伸ばしがあった。当時イカは大漁で、道路の両側はイカナヤが続いていて、イカ襖(ふすま)といつてもいい程たくさん干してあった。七分ぐ



【今日日は、こんな日】

すべては戦争に勝つために

小学校は国民学校と改称(昭和六年)

(昭和六年)

中国との戦争も四年になり、日米開戦がもはや避けられない雲行きになってきた。昭和十六年四月一日、軍国主義的な教育を強化するため(国民学校令)が出され、全国の小学校が国民学校と名前を変えた。

らい乾燥したイカの耳を広げ、身は自分の足で押さえて、骨がプツンと切れて音がするまで引き伸ばし、足も十本共伸ばし、二十枚を一束としてスルメイカとなる。工賃は昆布巻きより安かったと思うが、あまり記憶にない。そのお金を大事にしてとっておき、映画を見たり、兵隊遊びの道具を買ったりした。

随分と古い時代の話です。

—— この稿終わり ——

(本間さんには、六回にわたってどうもありがとうございました。)

町内の古平・沖・明和・稲倉石の各小学校も、新学期から新しい名札に書き替えられた。

この年十二月に太平洋戦争が始まると、学校での教育活動も、戦争目的と戦時下であるために大きく変わっていった。

- 教育内容
 - 『教育勅語』を中心として、修身科が重視された
 - 体操(鍛錬科)では、柔・剣道、相撲等がとり入れられ、暑中・寒中稽古が行われた
 - 校外の勤労奉仕
 - イタドリ(葉や赤クローバー)の種子等の採取
 - 築港荷揚場工事用の玉石採取
 - 農家の堆肥作りに野草や海藻等の採取
 - 暗渠排水用の柴の採取等
 - 栽培・飼育の実習
 - 学校で兎の飼育、畑での栽培
 - 兵士やその遺家族慰問
 - 慰問文を郷土出身の兵隊さんに送った
 - 慰問袋の切手代として一人一銭を集めた
 - 遺家族の慰安学芸会
 - 出征兵士の見送り等
 - (古平国民学校の昭和十六年・十八年『学校日誌』より)
- すべては、戦争に明け暮れた時代を象徴していたのが国民学校であった。当時を思い出される方もまだ多いことでしょう。